

ミャンマー現代史におけるアウンサンスーチーの意義 —国際政治学的視点から—

A Political Meaning of Aung San Suu Kyi in Modern History of Myanmar

—From the Viewpoint of the International Politics—

宮 玲子
Reiko MIYA

Abstract

This paper attempts to introduce an analytical framework for study of the political meaning of Aung San Suu Kyi in modern history of Myanmar from the viewpoint of the International Politics.

Aung San Suu Kyi is the most famous political leader in the recent history in Asia, and the world. She is striving to make the democracy in Myanmar, and her creative activities and indomitable courage is evaluated as the symbol of the important process of democratization in Myanmar from mass media of the worldwide. On the other hand, she is criticized as a stubborn lady about the opening of foreign capital and official development assistance from some economists and businesspersons.

Generally speaking, there are two main categories of approaches to understand the political meaning of Aung San Suu Kyi, namely, her personal idolry and activities. The first approach is the following her background and personal history. The second approach is making use of the analytical framework of the international Politics.

Myanmar remains the odd man out in South East Asia. It is a military dictatorship, not part of the region's still dynamic economy, and has a troubled relationship with the outside world, including that fact that it is the second largest supplier of heroin. Regrettable, a dawn of democracy in Myanmar is still far from the goal.

キーワード：アウンサンスーチー、ミャンマー、ビルマ、民主化、アジア現代史

Key Words : Aung San Suu Kyi, Myanmar, Burma, Democratization, Modern History in Asia

<目 次>

1. はじめに
 2. アウンサンスーチーの人物概要
 - (1) 誕生・修学・そして専業主婦へ
 - (2) 民主化運動家への道
 3. ミャンマー現代史におけるアウンサンスーチーの意義
 - (1) ミャンマー軍事独裁の現状
 - (2) アウンサンスーチーの政治哲学
 - (3) ミャンマー現代史におけるアウンサンスーチーの意義
 4. おわりに
- 注釈
- 参考文献

1. はじめに

周知のように、現在のミャンマー（旧ビルマ）は、軍事独裁政権が抑圧的な国家統治を行ない、民主化運動に携わる人々を逮捕・投獄し、さまざまな人権侵害を生み出すと同時に、いわゆる難民の輸出国となっている厳しい現状を抱える国である。そうした中であって、2008年9月現在においても自宅軟禁状態に置かれているアウンサンスーチー（Aung San Suu Kyi, 1945～）の名は、誰よりもこの国の世界的知名度を上げることに貢献し、常にこの国の現状に対する国際世論の喚起を促す歴史的とも言うべき金字塔であると言って良い。

しかしながら、多くの場合、マス・メディアの報道においては積極的な評価を与えられているこの女性運動家に対して、一部のビジネスマンや経済学者、官僚たちなどからは、逆に批判の声を耳にする場合もある。彼女の民主化に対する妥協を許さない頑固さが、かえってミャンマー国内の政治的不安定化をもたらし、経済交流や援助政策の障害となっているという見解である。

では、アウンサンスーチーの真意は、いったいどのようなものなのであろうか。彼女は、どのような経歴の持ち主であり、その思想・哲学の本質はいかなるものなのであろうか。そして、ビルマ国民が長期にわたってその彼女を支持し続けるのはなぜであろうか。

本稿では、こうした問題意識に基づいて、以下、アウンサンスーチーの人物概要を時代背景とともに概観し、彼女の思想・哲学の本質と政治活動の意味を国際政治学的に検討しつつ、そのミャンマー現代史における意義を論じたいと思う。

2. アウンサンスーチーの人物概要

(1) 誕生・修学・そして専業主婦へ

アウンサンスーチーは、1945年6月19日、日領ビルマ（当時）の首都ヤンゴン（現ラングーン）において、ビルマ独立運動史にその輝かしい勇名を残したアウンサン（Aung San; 1915-47）将軍を父とし、元看護婦のキンチーを母として、3人兄弟の末子として生まれた。⁽¹⁾ この夫婦には、他にアウンサンウーとアウンサンリンという二人の男子がいたが、弟の方は幼少のときに事故死してしまったので、父母兄妹の四人家族であった。

日本占領下であって、父が指導者の一人であった反ファシスト人民自由連盟（パサパラ）の率いるビルマ国軍は、旧宗主国たる英軍と協力して抗日闘争を展開していた。⁽²⁾ 彼女の父は、もともとヤンゴン大学の学生運動家として1930年代後半から頭角をあらわし、反英民族団体タキン党に入党して書記長として活動した後、ビルマを密出国し、いわゆる「南機関」（日本軍の対ビルマ謀略を担当した）の指導下で軍事訓練を受け、太平洋戦争開戦直後にはビルマ独立義勇軍（後のビルマ国軍）の幹部将校となり、41年12月から日本軍と呼応して英領ビルマに進軍した。しかし、日本軍が英軍を追い出した後にビルマで軍政の実施を宣言したため（42年6月4日）、即時独立を求めているアウンサン将軍らは日本軍に裏切られた形となった。43年8月、日本はバモオ博士を国家元首に据えてビルマに名目的な独立を付与するが、英国に代わる日本軍の植民地統治型の占領政策に対して、アウンサンたち独立派は憤慨する。彼はバモオ政権の国防大臣を務めながら好機を待ち、44年8月、ビルマ国軍と二つの地下組織（ビルマ共産党と人民革命党）とを統合し、統一地下抗日組織（のちの反ファシスト人民自由連盟）を結成してその議長に就任するとともに、翌45年3月27日、日本軍に対し一斉蜂起し、米軍の加勢によって再び回帰して来た英軍と協力しつつ、日本軍を駆逐することに成功する。

しかし、アウンサン将軍は、1947年7月、32歳の時に政敵ウー・ソオの部下たちによって他の要人たちと共に暗殺されてしまい、半年後に予定されていた悲願のビルマ独立を見ることなく他界した悲劇の英雄であった。わずか2歳の時に父との永遠の決別を強いられたアウンサンスーチーは、したがって、この偉大な父の足跡と功績を自ら学習して知ることになる。独立後のビルマにおいて、政府がアウンサン将軍を国民統合の象徴として賞賛し、国民もまた彼を尊敬する教育を施されたため、彼女は成人するまでに「独立の父」の娘であることを常に自覚して成長していく。

アウンサンスーチーは、母の影響で敬虔な上座仏教徒として育っていった。しかし、1960年代半ばまでのビルマでは、教育の質の高さから英領時代に創設されたキリスト教系の私立学校に人気が集まっていたため、進学した学校はヤンゴンにあるキリスト教系の学校（聖フランシスコ修道会学校およびメソヂスト高等学校）であった。わが国でも1980年代まで、主として経済的に裕福な家庭の子女が、青山学院、明治学院、東洋英和女学院などのキリスト教系の私立学校に進学した事情と共通する。

1960年、母のキンチーが当時のウー・ヌ政権によって駐インド大使に任命されたため、アウ

ンサンスーチーはデリーへ移り、ここから彼女の長期にわたる海外生活が始まることになった。ここではジーザス・メアリー修道会学校を経て、レイディー・シュリラム・カレッジに移り、政治学を修めた。特に、インド滞在中は当時の首相であったネルーの家族と新交し、マハトマ・ガンディーの非暴力不服従運動の思想に影響を受けたと言われている。

1964年9月、アウンサンスーチーは、哲学、政治学、そして経済学を学ぶために、インドから英国のオクスフォード大学セント・ヒューズ・カレッジに留学する。当時の世界は、ベトナム反戦運動をはじめとして、さまざまな政治的・社会的テーマで学生運動が盛んな時代であったが、彼女もまた、そうした運動に少なからず影響を受けた少壮の女子学生の一人であった。

1967年、オクスフォード大学卒業後は、ヒュー・ティンカー教授に師事してビルマ政治史担当の大学の助手となり、69年からは米国ニューヨーク大学の大学院に進学、ビルマ政治史を専門にするフランク・トレイガー教授に師事しつつ、国際関係論を学んだ。しかし、修学途中で応募した国連本部職員に採用されたために中退し、その後3年間を国連のスタッフとして働くことになった。

1972年1月1日、アウンサンスーチーは、オクスフォード時代から親交のあった英国人のマイケル・アリス（後にチベット研究者としてオクスフォード大学教授となる）と結婚した（26歳）。この時、アウンサンスーチーは、ビルマ独立運動の英雄の娘が旧宗主国である英国の男性と結婚することを家族やビルマ国民が誤解するのではないかと悩み、「国民が私を必要としたときには、私が彼らのために本分を尽くすのを手助けしてほしい」旨、マイケルに手紙に書いてきたと言われている。当時から、彼女はすでに自己の運命を感じとっていたのかも知れない。

アウンサンスーチーは、結婚と同時に国連本部職員を退職し、専業主婦としての生活に入った。1988年に長男アレクザンダーが、4年後に次男のキムが生まれたが、しかし、もともと勉学や研究に才能のあった彼女は、オクスフォード大学クイーン・エリザベス・カレッジで勉強を再開し、後にロンドン大学東洋アフリカ研究院（SOAS）の博士課程に進学して、ビルマ近代文学におけるナショナリズムの影響をテーマにした博士論文の執筆を開始する。そして、このテーマの中核的な題材として、父であるアウンサン将軍の思想・哲学を理解することは必然であった。

その後、彼女は父アウンサンのことを調べるうちに、アウンサンと日本との関係について興味を抱くようになり、そのためオクスフォード大学で日本語の勉強を修め、1985年10月、日本の国際交流基金の招へいで、約1年間、京都大学東南アジア研究センターに客員研究員として迎えられた（40歳）。なお、彼女の日本語能力は、三島由紀夫の小説を原書で読めるまでの力があったと言われている。

1986年7月、日本を去る際にヤンゴンに立ち寄り、久しく会わなかった母キンチーと共にすごし、同年10月、オクスフォードに帰着した。この時、妻として、母として、大学院生として、彼女は人生の最も幸福な日々を送っていた。しかし、歴史はこの一人の女性を稀代な運命へと誘っていくことになる。

(2) 民主化運動家への道

日本から帰国した1年半後の1988年3月31日、ヤンゴンから母の危篤を伝える国際電話が入った。この悲報に従い、アウンサンスーチーはただちにビルマへ戻った。しかし、彼女がビルマへ来たこの時期こそ、まさに同国で学生たちが反政府運動を展開した時とピッタリ重なっていた。結果的に、母キンチーは危篤状態を脱してその年の12月まで生きながらえたが、この母の好運と引き換えに、アウンサンスーチーはビルマ現代史の大きな濁流の中に飲みこまれていくことになった。

この1988年は、ビルマで全国規模の民主化運動が展開された年であり、26年間続いたネイウインの軍事独裁体制に対する国民の不満が高まり、ヤンゴン工科大学やヤンゴン大学を中心とした学生運動に市民が合流した巨大な政治的うねりが生み出された年であった。このような状況に対して、警察や軍は発砲や強硬な取り締まりを行ない、運動は多大な犠牲者を出したが、しかし、ネイウイン議長を退陣させることに成功した。

ちょうどビルマ「独立の父」アウンサンの娘が帰国しているというニュースも伝わり、活動家たちは他の市民らと共に彼女の家に出入りして連絡を取り合うようになった。アウンサンスーチー本人もまた、彼らとの交流を通して、自身の歴史的役割を改めて自覚することになり、彼女もついに表舞台への登場を決意するに至る。

民主化運動家としてのアウンサンスーチーのデビューは、1988年8月26日、ヤンゴンを象徴する仏塔シュエダゴン・パゴダの西側広場で開催された大規模な集会における演説であったと言われている。彼女はここで、「この運動は、第二の独立闘争ということができます。今や私たちは民主主義の独立闘争に加わったのです」という有名な発言をおこなった。集会参加者は5万人以上と言われており、「独立の父」アウンサンの子である彼女の人気は圧倒的で、当初からリーダー不在の状況に悩んでいた運動家たちにとっては、まさしく全体を指導する人物としての救世主の登場であった。こうして全国規模で盛り上がっていく民主化運動に対して、国内の混乱と自分達の権威の失墜を恐れた国軍は、全権を掌握することにより、同年9月18日、治安回復と複数政党制に基づく総選挙の実施を掲げて軍事独裁政権を強化し、反対デモを続けた者には無差別発砲を繰り返しつつ、多大の犠牲者を出すに至った。

アウンサンスーチーは、反政府的立場を取る有力者の元国防大臣・ティンウーらと共に国民民主連盟(NLD)を結成し、その書記長に就任して、本格的な政治活動を開始した。NLDは結成当初から軍政当局に警戒され、彼女もさまざまな妨害を受けたが、しかし、精神的に国内各地を回って遊説し、1989年6月には「大多数の国民が同意しない命令・権力すべてに対して、義務として反抗しなければならぬ」という有名な党のスローガンを打ち立てた。

・自宅軟禁(第1回目)

1989年7月、アウンサンスーチーは、ヤンゴンにおける演説でネイウイン批判をしたことが原因で、同月20日、自宅軟禁に処されてしまう。この時、軍政側が法的根拠とした国家防衛法

こそは、人類史上にも特筆すべき悪法とも言うべきものであり、国の治安を乱すおそれのある者を政府の判断で事前に拘禁できるというネイウイン時代の1975年にできた法律である。

結果的に、1995年7月まで実に6年間続いたこの軟禁状態の中で、軍政側は海外に出るのであればすぐに解放すると提案したが、彼女はまったく応じなかった。この6年間のうちに、夫と2人の息子たちの面会は特別に2回だけ許された。家族との手紙のやりとりは許されたが、軍政による軟禁という不正な措置への抗議の証として、その後、彼女の方からその権利を放棄したと言われている。短波ラジオの受信は認められたが、新聞・雑誌は自由に読むことは許されなかった。生活費は軍政が援助を申し出たものを彼女が拒絶し、夫からの生活費援助も受け取らず、家具などを売り払って厳しい生活を続けた。また、電話線は切られ、訪問者は軍政側が指定する少数の人物だけに限られ、外部との接触は断たれた。

しかし、アウンサンスーチーは、こうした軟禁生活下にあっても、毎朝4時半に起床、上座仏教の内観瞑想を1時間おこない、その後は短波放送を聴き、室内運動をして、読書、水浴、掃除、室内の修繕などをおこない、夜は早く就寝する規則正しい生活を送った。また、民主化運動の過程で逮捕された多数の学生活動家たちに対する不当な取り扱いに反発し、11日間にわたるハンガーストライキ（絶食闘争）をおこない、軍政側から「拷問はおこなわない」旨の約束をとりつけたという武勇伝も伝えられている。

ところで、彼女の自宅軟禁中の1990年5月、軍政側はビルマで30年ぶりとなる複数政党制に基づく総選挙を実施した。アウンサンスーチーの率いるNLDは、さまざまな選挙妨害を受けながらも結果的に圧勝し、定数485議席のうち391議席（81%）を獲得、得票率も60%に迫る勢いを示した（アウンサンスーチー自身は軟禁中の身で立候補届けを出したが選管によって拒絶された）。しかし、この選挙結果に危機感を強めた軍政側は、政権委譲も、議会の開催も、アウンサンスーチーの解放もおこなわず、むしろ新憲法の制定を優先すべきであると宣言した上で、軍政側が恣意的に選んだ議員を中心に制憲国民会議を開催し、1990年総選挙の当選議員による議会開催は制憲国民会議における憲法草案の審議終了後とする旨、宣言した。言うまでもなく、これに反発したNLD関係者や学生活動家や僧侶らは逮捕・投獄された。

選挙結果を軍政側によって無視され、民主化への道が閉ざされたビルマに、しかし、1991年9月、アウンサンスーチーの非暴力による民主化運動の指導が評価されて、ノーベル平和賞が授与されることが決定したというニュースが飛びこんできた。同年12月におこなわれた授賞式には、夫のマイケルと二人の息子が代理出席し、国際社会における多くの人々の注目や関心をビルマに集めることに貢献した。

言うまでもなく、このニュースを軍政側は無視し、ビルマ国内での報道を全面的に禁じたが、しかし、国民は短波ラジオを通じて事実を知り、ヤンゴン市内では大学生たちがキャンパス内で祝福の集会を開催したが、すぐに警察と軍によって封じ込められた。

・自宅軟禁（第2回目）

1995年7月10日、アウンサンスーチーは、国際世論の批判が高まったことを察知した軍政側の判断によって、6年間にわたる自宅軟禁から解放された。NLDの書記長に復帰した彼女は、軍事政権に対する無条件の対話申し入れをおこなったが、しかし、軍政側はこれには応じなかった。また、自宅前で定期的な対話集会も開催したが、96年9月以降はこれも禁じられた。98年8月には、彼女がラングーンを出て自動車で地方のNLD支部に出かけることを実力で阻止した。軍政側は、彼女が国民と直接接する機会を何よりも恐れたのである。

同年9月、アウンサンスーチーは、NLDの組織的活動を通じて、1990年の総選挙で当選した議員の過半数から委任状を得、国会代表者委員会（CRPP、通称10人委員会）を設置し、軍政側が開催しようとしぬい当選議員による国会を独自に10人の代表者で代行開催するという行動に出る。軍政側はこの行動に危機感をつのらせ、国営紙を通じてアウンサンスーチーや他の幹部への人身攻撃を断行し、党员およびその家族に対するさまざまな抑圧をおこなった。

1999年初頭になると、アウンサンスーチーの夫マイケルが前立腺ガンであることが判明し、妻である彼女と最後の面会を求めてビルマ入国のヴィザを申請するという事態が生じる。しかし、NLDと軍政との関係が悪化の一途をたどっていた当時の状況はこれを認可せず、軍政側はアウンサンスーチーがビルマを出て英国に行くべきだと主張して、マイケルのヴィザ申請を却下した。このときアウンサンスーチーは、夫の最期を看取るためにビルマから出てしまったら二度と帰国できないことが明白だったため、民主化運動の指導者としての使命を優先させ、夫との再会をあきらめた。マイケルは同年3月27日に死去し、アウンサンスーチーはこの世で二人といないかけがえのない心の支えを失った。

夫の死を乗り越えて、アウンサンスーチーは2000年8月、再び地方への自動車による移動途中を軍政側によって連れ戻されてしまうが、同年9月、懲りることなく党员らと一緒に列車でマンガレーへ向かうとラングーン中央駅に行く。しかし、窓口で切符の販売を拒否され、その理由に納得せず駅構内から動かずにいると、三たび当局に拘束され、2度目の自宅軟禁に処されてしまう。言うまでもなく、現場に居たNLD関係者は全員逮捕・投獄された。

ただし、この2回目の自宅軟禁は、軍政側との秘密裏の直接対話を伴う軟禁となった。これには国連事務総長が任命した事務総長直轄のビルマ問題担当特使であったラザリ・イスマイル（マレーシア人外交官兼ビジネスマン）の仲介が大きな役割を果たしていたと伝えられている。

・自宅軟禁（第3回目）

軍政は、2002年5月、国際世論の批判の高まりとラザリ特使の説得に応じる形で、2度目の自宅軟禁からアウンサンスーチーを解放する。1年半以上にわたる軟禁中に相互の「対話」の成果に国際社会は期待を寄せたが、解放後、軍政側がその対話そのものを中断してしまった。

解放後、アウンサンスーチーは積極的に地方旅行をおこない、行く先々で数千人から数万人にも及ぶ多数の人々に向けた演説をするようになった。このことは、1988年以来、学生運動や

市民運動を鎮圧しつつ、国民が政治より経済に関心を持つように仕向けたことに成功したとうぬぼれていた軍政側にとっては、予想外の危機感を抱かせた。彼らにとっては、やはりアウンサンスーチーは依然として最も危険な政治的存在であった。

こうした軍政側の危機意識は、2003年以降、彼らをしてアウンサンスーチーたちが訪問する町々で組織的な妨害行動を起こさせることになり（連邦連帯発展協会（USDA）のメンバーによる）、ついに同年5月30日、有名なディベーイン事件へと発展して大量の犠牲者を出すことになってしまった。それは、同日の夜8時頃、アウンサンスーチーと約300人ほどのNLD党員一行がモンユワ市での演説を終えて次の町に移動する途中、ディベーインという町を通過中に、武装した数千人の人々に襲われた事件であった。

この事件による死者はNLD側の非公式表明で100人以上とされており、アウンサンスーチーとその一行に対する明白な組織的襲撃事件であった。彼女自身は、襲撃された際に車に乗って逃走することに成功したが、隣町で待ち伏せていた当局に捕らえられ、軍事施設に監禁された。その後、軍政側は彼女を自宅に移して軟禁に処し（同年9月）、以後、現在（2008年9月）に至るまで、アウンサンスーチーはこの3度目の長期軟禁状態に置かれ続けている。

3. ミャンマー現代史におけるアウンサンスーチーの意義

（1）ミャンマー軍事独裁の現状

現在、ビルマを支配している軍事政権は、1988年9月18日に発足した。当時はその名称を国家法秩序回復評議会（SLORC）といったが、97年11月に国家平和開発評議会（SPDC）へ改称し、現在に至っている。軍政のトップは、92年にまでソウマウン上級大将が務め、その後、タンシュエ上級大将が引き継ぎ、現在も議長として君臨している。⁽³⁾ ただし、旧ソ連や北朝鮮などと同様にして、独裁国家の首長たる彼自身が表舞台に登場することはほとんどなく、ナンバー3たるキンニユン大将が、ASEANなどをはじめとする国際舞台での「表の顔」であった。軍政側は、2003年、この比較的国際社会からも受けの良いキンニユンを首相に就任させ、タンシュエの指示の下で7か条から成る「民主主義へのロードマップ」を公表した。

1. 1996年以来長期中断されていた制憲国民会議を再開する。
2. その国民会議で新憲法の基本方針を決定する。
3. その基本方針に基づき軍政が新憲法案を起草する。
4. その新憲法草案の可否を国民投票で問う。
5. その新憲法に基づいて新たな国会議員選挙を実施する。
6. そこで当選した議員によって構成される新国会を召集し、新大統領（国家元首）を選出する。
7. その新政府へ軍事政権から政権を委譲する。

いわゆる「民政移管」と呼ばれる政治学の基本概念を絵に書いたような教科書的文言が羅列された文章であるが、言うまでもなく、この「ロードマップ」には多数の問題点が含まれている。上智大学の根本教授は、その問題点を、①期間・日程の具体性がない、②1990年の選挙結果を無視している、③制憲国民会議の再開が非民主的な手続きで進められることになっている、という3つにまとめている。

「・・・ひとつは、期間・日程について全く触れていないことである。何年かけて最終段階まで達するのか、軍政は一言も示していない。これではいくらでも先延ばしすることが可能である。第二の問題は、・・・(中略)・・・総選挙をやり直すと宣言していること、すなわちNLDが圧勝した1990年5月の総選挙結果を無視することを公式に宣言していることである。たとえこの「ロードマップ」が公表された2003年8月現在から見て13年も前の選挙結果であるとしてそのときの民意の「時効」を主張するにしても、アウンサンスーチーやNLDに事前に理解を求めることなく新たな選挙のやり直しを一方的に宣言したことはルール違反ならびに礼儀違反であろう。第三は、「道程」の始まりとしての制憲国民会議の再開が、1996年の中断以前と同じような非民主的な手続きで進められ、軍政が示す憲法の基本方針をそのまま認めるだけの会議となるならば、それは民主化への道筋としては大きな誤りを有することになるということである。・・・(中略)・・・NLDは結局これらの問題点と、アウンサンスーチーに対する自宅軟禁が解かれていないことに不満を表明して、制憲国民会議への参加を拒否した。・・・」⁽⁴⁾

軍政側は、あくまでもアウンサンスーチーやNLDを入れない形で、自己の既得権を保全した「民主主義へのロードマップ」を実現したいわけだが、それは国軍が監視・介入する議会による制限された民主主義を最終目的地とすることを意味しているというわけである。キンニユンの失脚や、首都移転（2005年11月、ヤンゴンからビルマ中央部のピンマナーに移動、新首都名ネイピードー）などの一連の事件は、この「ロードマップ」が軍政内部でも懸案事項になっていることを示している。また、ビルマは、1997年以来アセアン（東南アジア諸国連合ASEAN）に加盟しているが、こうした軍政状態の継続から、国際社会からの孤立はいつそう深まるばかりである。2006年9月には、国連安全保障理事会がビルマ問題を正式の議題（アジェンダ）に含めることを賛成多数で可決し、審議が開始されており、国際社会の風は完全に軍政側とは逆風である。

(2) アウンサンスーチーの政治哲学

さて、以上、アウンサンスーチーの経歴や時代的背景を見て来たが、そうした彼女の人生を支えた思想や哲学はどのようなものであるのだろうか。ここでは、これまで概観してきた彼女の行動の根底にある考え方を論じてみよう。⁽⁵⁾ 上智大学の根本教授は、民主化運動の指導者としてのアウンサンスーチーの思想・哲学を、①恐怖からの自由、②思想と行動の一致、③正し

い目的と正しい手段という三つのコンセプトにまとめている。⁽⁶⁾

①恐怖からの自由

アウンサンスーチーの思想と行動の第一の特徴は、何よりもまず、「恐怖からの自由」という概念である。換言すれば、これは、国民一人一人が自分の中の「恐怖」を克服し、不当な命令にはけっして服従しないという生き方を軍政に対し示すべきであるとする考え方である。

「・・・彼女が1989年6月に、「大多数の国民が同意しない命令・権力すべてに対して、義務として反抗しなければならない」という言い方で、軍政に対する非暴力不服従を国民に訴えたとき、そこに「義務として」という言葉を入れたのは、この「恐怖からの自由」という基本哲学に基づいている。すなわち、恐怖のために「自分は何もできないが、誰かに勇気をもって軍政と闘ってほしい」とか、「いまは恐くて何もできないが、民主化されたら喜んで協力したい」といった他人任せ・状況任せの姿勢でいたのでは、いくら民主主義を望んでも、永遠にそれは実現しないと彼女は断言するのである。・・・」⁽⁷⁾

②思想と行動の一致

アウンサンスーチーの思想と行動の二つ目の特徴は、「思想と行動の一致」である。換言すれば、これは、権利と義務の対関係であり、真の民主主義を実現するためには理論だけでは不十分であり、そこに勇気ある行動が伴わなければならないという考え方である。

「・・・アウンサンスーチーの考え方の背後には、思想と行動は一致しなければならず、また権利と義務は対の関係にあるという原則がある。ビルマのような強権的な政権下にある国家において、人々が民主主義を求める場合、権利としての民主主義を口先で求めるだけではだめで、民主主義にふさわしい行動を通して求めていかなければならず（思想と行動の一致）、そのためにも抑圧的な政府に対する恐怖から自らを解放する勇気を持つ義務がある（権利と義務の対の関係）と考えるのである。彼女はNLDの党員に対して、「それができないのなら民主主義など求めないことだ」とまで語ったことすらある。・・・」⁽⁸⁾

③正しい目的と正しい手段

アウンサンスーチーの思想と行動の三つ目の特徴は、「正しい目的と正しい手段」である。換言すれば、これは、民主主義を実現するためには、あくまでも民主的な手段を用いて活動を展開しなければならないということである。

「・・・彼女は国民に対し、軍事政権が暴力や策略で抑圧しようとしているからといって、民主主義を求める人々がもし同じように軍政に暴力や策略で対抗してしまったら、もしかしたら

軍政は倒せるかもしれないが、その後には作られる新しい体制は望んでいた民主主義的なものではなく、困ったときには暴力や策略に頼れば良いという伝統を引き継ぐ非民主的な体制となってしまうと語る。彼女の非暴力主義は、ここから生じているとあってよい。民主主義と暴力は最も合わない関係にあり、暴力で政治的問題を解決しようとしてきたビルマのこれまでのあり方に、最終的な決別をするべく、民主的な手段だけを用いて、民主主義を実現しようとするのである。・・・」⁽⁹⁾

(3) ミャンマー現代史におけるアウンサンスーチーの意義

ところで、アウンサンスーチーのこうした活動や思想が、国際社会において評価が分かれるところであるという事実は周知である。特に、彼女が外資系企業のビルマ進出や先進国のODAに対して厳しい反応をしていることは有名である。ただし、言うまでもなくアウンサンスーチーは資本主義に対して反感を抱いているわけではなく、ビルマ経済を発展させるために外資や援助が必要であることはよく承知している。名門オクスフォード大学で経済学や政治学を学んだ俊英が、そんなことも分からないはずがない。要するに、彼女の真意は、先述した「正しい目的と正しい手段」に関連したところにある。彼女にとって、現在のビルマが目指すべき「正しい目的」は民主化であり、はたして外資や援助がその正しい目的を実現するための「正しい手段」として有効に作用するのかということが問題なのである。

「・・・現状のビルマに投資する場合、軍政と直接・間接に組まない限り、企業活動はできず、生産や交易によって生じる利益も、国民の多くへ浸透する前に、軍政側や利権関係者に吸い取られてしまう部分が強。官僚制が未熟で、経済テクノクラートを軍政が育てようとしな。いな、ビルマへの進出企業自体が、軍政の非合理的な経済政策のために、利益をあげられずに苦しんでいる場合が多い。また、仮に外資の進出が多くモノを市場に出回らせ、国庫を多少なりとも豊かにするとしても、軍政という非民主的政府が核心にいるかぎり、その「豊かさ」は国家予算の約半分を占める国防費へとまわり、国家予算の1割程度しか占めない国民の保健・衛生・教育・社会福祉へまわる可能性はきわめて低い。・・・」⁽¹⁰⁾

もちろん、民主化がある程度実現されてくれば、国家予算の使い方に民意が反映されるようになるため、それまで投資は待つてほしいというのがアウンサンスーチーの主張であると考えられる。

現在のビルマは、かつての東アジアやアセアンの国々のように、民主主義や人権をある程度犠牲にした「開発独裁」によって経済成長を実現させ、しかる後に民主化へつながる基本条件を整えることが可能となるための国家的基盤がない。そこでは、自分たちの地位や権力の確保を最優先させ、官僚、特に経済テクノクラートを育てようせず、教育にも力を入れず、国民を「敵」と見なすかのようなエリート軍人たちの文字通りの独裁国家があるだけであり、こう

した状況では、経済学者やビジネスマンが言うような開発政策が成立するための「政治的インフラストラクチュア」が決定的に不足していると考えられるのである。

つまり、現状のビルマにあっては、こうした政治学のおよそ国際政治学的な視点から考察する限りにおいて、アウンサンスーチーの主張の方が現実性を帯びていると言えよう。今のビルマにとっては、経済学者やビジネスマンが唱える開発主義はむしろ「迷惑」であると言わざるを得ない。

4. おわりに

本稿では、現代ミャンマーにおける民主化運動家としてのアウンサンスーチーの経歴やその時代背景を概観しつつ、ミャンマー現代史における彼女の政治活動が持つ意義を考察してきた。その過程で、彼女の頑固なまでの非妥協性と不屈の行動が、彼女自身の思想・哲学によって裏づけされた純粋に論理的な産物である事実を確認しつつ、特に、この国への外資や援助に対して彼女が懐疑的態度を取る理由が、祖国の現状を冷静に分析した結果であり、少なくとも政治学的もしくは国際政治学的な視点から見た場合には、それが学術的妥当性を有する主張であることが論証された。

こうしたアウンサンスーチーの主張に理解を示す意味でも、今後、国際社会はミャンマーに対していたずらに外資や援助を施策することに走らず、むしろ国際世論を喚起しながら政治的圧力をかけていきつつ、ミャンマーがアウンサンスーチーをはじめとするミャンマー人みずからの手によって自力で民主化することを期待していく必要がある。それこそが、このネルソン・マンデラ、リゴベルタ・メンチュウ、ダライ・ラマ、そしてマザー・テレサなどと並ぶ偉大な政治的リーダーに対する敬意と言えるであろう。⁽¹¹⁾

【注 釈】

- (1) 人物としてのアウンサンスーチーの伝記は、根本（2008）が代表的である。なお、彼女の名前については、「彼女の名前アウンサンスーチーは、けっして「アウンサン家のスーチーさん」ということではない。姓のないビルマ人の社会では、「アウンサンスーチー」でひと続きの名前である。父の名前（アウンサン）＋祖母の名前（スー）＋母の名前の一部（チー）という構造から成る彼女の名前は、意味としては「アウン＝成功する」「サン＝特別の」「スー＝集める」「チー＝澄んでいる」という4つから構成される。この時代に生まれたビルマ人としては長い名前であるが、父や母の名前の一部をつけて名前を構成するという名づけ方法そのものは、ビルマではめずらしいことではない。」（根本（2008）135-136頁）との指摘がある。
- (2) アウンサンスーチーの父であるアウンサン将軍については、根本（1996）を参照せよ。
- (3) アウンサンスーチーの政治活動がミャンマー軍事政権へ与えた影響については、根本・田辺（2003）や根本（2003）などに詳しい。
- (4) 上記引用は、根本（2008）150-151頁による。
- (5) アウンサンスーチーの思想と行動についての体系的な研究については、伊藤（2001）、根本（1996）、根本（2001）などを参照せよ。

- (6) 上記引用は、根本（2008）153頁による。
- (7) 上記引用は、根本（2008）153頁による。
- (8) 上記引用は、根本（2008）153頁による。
- (9) 上記引用は、根本（2008）154頁による。
- (10) 上記引用は、根本（2008）155頁による。
- (11) アウンサンスーチー自身の著作はその知名度に比例して、代表的なものだけでも、アウンサンスーチー（1991）、アウンサンスーチー（1996 A）、アウンサンスーチー（1996 B）、アウンサンスーチー（2000）など、多数の文献が出版されている。

【参 考 文 献】

- アウンサンスーチー（ヤンソン由実子訳）『自由』（集英社、1991年）
- アウンサンスーチー（伊野憲治訳・編）『アウンサンスーチー演説集』（みすず書房、1996年A）
- アウンサンスーチー（土佐桂子・永井浩共訳）『ビルマからの手紙』（毎日新聞社、1996年B）
- アウンサンスーチー（大石幹夫訳）『希望の声』（岩波書店、2000年）
- 伊野憲治『アウンサンスーチーの思想と行動』（アジア女性交流・研究フォーラム、2001年）
- 根本敬『アウン・サン：封印された独立ビルマの夢』（岩波書店、1996年）
- 「アウンサンスーチーの思想と行動：『恐怖に打ち勝つ自己』と『真理の追究』」『アジア文化研究』別冊10号（国際基督教大学アジア文化研究所、2001年）所収
- ・田辺寿夫（共著）、『ビルマ軍事政権とアウンサンスーチー』（角川新書、2003年）
- 「軍のあり方：ビルマ軍事政権に見る国家統治の現実」『アジア新世紀』7巻（岩波書店、2003年）所収
- 「アウンサンスーチー」石井貫太郎編『現代世界の女性リーダーたち』（ミネルヴァ書房、2008年）